

札幌市立伏見中学校の取組

1. 研究のねらい

本校は、昭和 55 (1980) 年以来、カナダ・アルバータ州エドモントン氏の D. S. マッケンジー中学校と姉妹校交流を行っている。交流を始めて今年で 34 年目となり、34 年間でカナダから 176 名、日本からは 198 名の生徒、先生が相互に学校を訪問し、ホームステイをしながら交流を深めている。保護者や卒業生の親、教職員、交流会の OB・OG でつくる「伏見・マッケンジー交流会」は、生徒および父母の交流を促進し、両国間の国際理解と親善を深めることを目的として、現地との連絡調整をはじめ、ホームステイ先選びや滞在中の計画づくりなど様々な活動を行っている。

ここ数年の相互の訪問は毎年度交互に行われており、昨年度は 2014 年 3 月に本校生徒 6 名が 2 週間ほどカナダに滞在し、マッケンジー中学校を訪問した。今年度は 2014 年 11 月に、カナダから生徒 6 名と引率の先生 2 名が本校を訪れ、会員宅でホームステイをしながら約 2 週間の滞在中を楽しんだ。伏見中学校にもそのうち 5 日間登校し、1 学年 4 クラス、2 年生 2 クラスに所属して本校の生徒とともに授業を受けたり、部活動に参加したりしながら、異文化をもつ同年代同士の関わりを楽しんだ。

英語科では、

- ・コミュニケーションに対する積極的な態度を身に付ける。
 - ・異文化理解はもちろん、文化は違っても自分たちと同じ時代を生きる仲間として共感的な理解をする。
- 以上 2 点を意識して授業を進めた。

2. 取組内容

(1) 授業以外での交流

○ウェルカムパーティ

マッケンジー中学校からの生徒 6 名と先生 2 名が来校して 2 日目の放課後に、本校の一室で歓迎パーティーが開催された。歓迎の意を示すことと、両校の生徒が打ち解けることを目的として行われた。本校の生徒は自由参加で、1 学年から 3 学年までの約 30 名が集まった。生徒会役員が校歌とよさこいを披露したあと、マッケンジー中学校の生徒も一緒によさこいを踊ったり、法被を着て本校生徒とともに写真撮影をして交流を深めた。伝統文化である南京玉すだれの指導者による演技も鑑賞し、その後は南京玉すだれを実際に触って遊んだ。マッケンジー中学校の生徒たちも初日は緊張していた様子だったが、このパーティーで緊張もほぐれ、本校の生徒との交流を楽しんでいた。

本校の 1 学年は話しかけることに自信がない様子が見られたが、3 学年は今までに学んだ表現を用いて積極的に英語で話しかけていた。伝えたいことが英語で思い浮かばない時も、身振り手振りを使って簡単な英語で懸命に説明していた。実際に思いを伝える相手を目の前にして、改めて言語の大切さを感じ、「もっと伝えられるようになりたい。相手の言っていることを分かりかたい。」という気持ちが芽生えたようである。

(2) 授業での取組

①インタビュー活動

マッケンジー中学校の生徒が来校したとき、1 学年の英語の授業では can の導入を行う時期であった。簡単な漢字をネイサン (1 学年に所属したマッケンジー中学校生徒) に見せて、“Can you read this kanji?” と質問し、ネイサンが読めない漢字は他の生徒が教えてあげるという流れで導入を行った。

その後、“Can you eat~?” “Can you wink?” など “can” を使った質問をそれぞれが考え、「can を使って質問し、仲間のできることを見つける」という内容で、ネイサンを含めた学級の仲間にインタビューをする活動を行った。

今までの授業の中でも、積極的に会話を継続し、発展させていく態度を育成するため、インタビュー活動の際には「相手の言ったことに対して相づちを打ったり、反応をする」ということを意識してきた。そのため、今回は「今までに学んだ相づちや反応の表現を積極的に使って会話をつなげる」ことを、コミュニケーション面での目標として活動を行った。

S1 : Can you play the piano?
S2 : Yes, I can.
S1 : Oh, that's great.

S1 : Can you wink?
S2 : Yes, I can.
S1 : Show me, please!

このように、生徒はネイサンにも積極的に話しかけ、相づちや反応を使って実際に見せてもらったりしながら会話をつなげていた。コミュニケーションへの積極的な態度を身に付けるためにも、1学年では簡単な相づちや反応、2学年では相手の言ったことに対して質問をする、3学年では賛成や反対の意見を述べる、というように発達段階に合わせて発展させ、継続して実践していきたい。

②日本の遊びを伝える活動

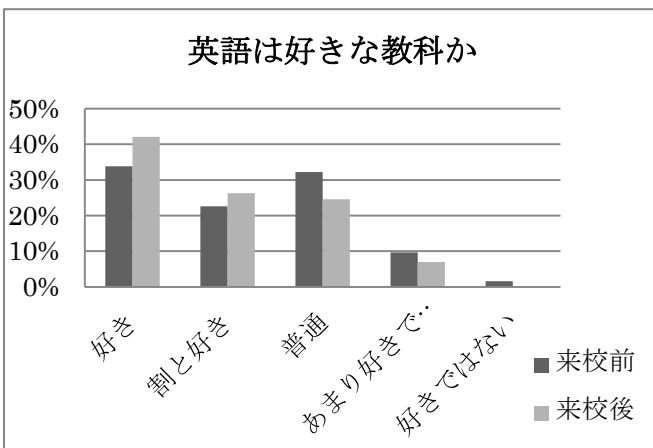
マッケンジー中学校生徒の登校最終日、英語の時間の中で、日本の遊びを紹介するという時間を設定した。事前に5班に分かれて、折り紙、あやとり、かるた、福笑い、けん玉の担当を決め、準備活動を行った。その際、生徒たちは「折り紙はネイサンがあとで遊べるように、カエルにしよう。」「あやとりの糸を引くってどうやって言ったら伝わるだろう。」と、相手意識をもって準備していた。当日も、ネイサンがうまくできたらほめたり、うまくいかないときは励まし、楽しんでもらうために慣れない英語と身ぶり手ぶりを使って一生懸命日本の遊びの楽しさを伝えていた。



3. 成果と課題

(1) 成果

マッケンジー中学校からの生徒が所属した6学級のうち、1学年から1学級、2年生から1学級、合計2学級に、来校前と来校後にアンケートを行った。2回のアンケートを比べて特に顕著な違いが見られたのが、「英語は好きな教科か」という質問であった。マッケンジー中学校の生徒たちが来校する前は「好きな教科である」と答えた生徒が34%であったが、来校後は42%と8%上昇していた。



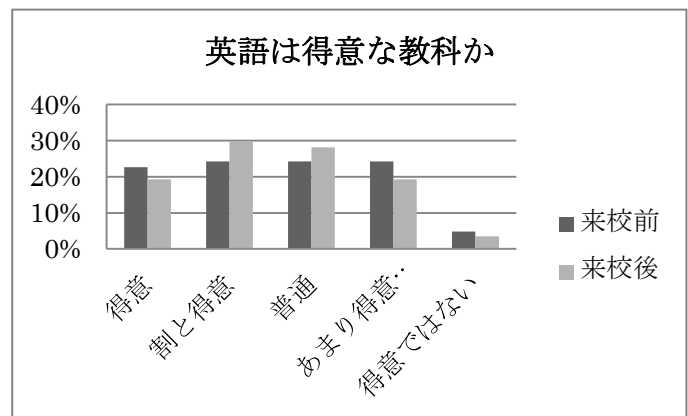
「今まで授業で学んだことを使って話して、通じたことが嬉しかった。また来たらもっと話してみたいです。」という生徒の感想から、実際に英語を用いてコミュニケーションをとれたことで今までに身に付けた英語の力を実感し、英語を学ぶことが楽しい、好きだと感じるようになったと考えられる。

また、「外国人と日本人は全く違うとイメージしていたが、同じところはたくさんあると知った。少し、留学を試みたくなった。」「違う文化、言語で育った人でも、自分たちとあまり変わらなく、話すことや聞くこと全てに共感することができて、交流

が素晴らしいものに思えた。今回の経験でより一層外国人の友達がほしいという気持ちが強くなりました。」と書いている生徒もいて、異文化をもつ人々への共感的理解が進んだことがわかる。

(2) 課題

「英語は得意な教科か」という質問で、来校前と後を比べると、「得意な教科である」と答えた生徒は23%から19%と4%下降していた。理由としては、「英語を話すスピードが速すぎて、簡単な英語でも聞き取れなかった。」「英語が話せないと困るので、しっかりと基本を覚えて、使えるようになりたい。」という感想から、今まで英会話教室に通っていたり、テストで高得点をとって「得意」だと感じていた生徒が、実際に英語圏の人と生活することで、新たな自分の課題を見付けたからだと推測できる。今後は、生徒にとってより現実感があり、どんな場面で使う表現なのかが分かりやすい場面設定をして、授業を進めていくことが大切だと改めて感じた。



が大切だと改めて感じた。